



## International Women's Day

### — 子どもたちと過ごした国際女性デー —

みなさんこんにちは！国際赤十字・赤新月社連盟（以下、IFRC）パプアニューギニア国事務所に派遣されている木本です！

3月8日の国際女性デーに合わせ、ここパプアニューギニアでもイベントが開催されました。

3月6日には、パプアニューギニア赤十字社主催で、首都ポートモレスビーにある、パプアニューギニア赤十字社特別支援学校でイベントを開催しました。この学校では、障がいのある子どもたちがそれぞれのペースに合わせて学びながら、将来の自立に向けた力を身につけています。企画から準備・運営まで携わったこのイベントには、生徒やその家族、教職員に加え、赤十字国際委員会（以下、ICRC）・国連ウィメン（UNWOMEN）のメンバーも招待し、女性や女児の権利、公平、そして一人ひとりの行動の大切さについて、参加者みんなで考える時間となりました。

また国際女性デーの3月8日には、パプアニューギニア政府、日本国際協力機構（以下、JICA）とAmazing Port Moresby（地元企画団体）主催のウォーキングイベントにチームで参加しました。

### パプアニューギニアで続くジェンダー課題

パプアニューギニアでは、男女間の格差が今も大きな社会課題となっています。

世界経済フォーラムが公表したGlobal Gender Gap Report（世界男女格差報告書）2025では、148か国中133位で、東アジア・太平洋地域の中で最下位に位置しています。女性の政治参加や教育、経済的機会の面でいずれも課題が残ることが示されています。

女性に対する暴力も深刻です。国連ウィメンのデータでは、15～49歳の女性の30.6%が過去12か月の間にパートナーから身体的または性的被害を受けたと報告されています。20～24歳の女性の27.3%が18歳未満で結婚または同居を経験しており、2024年2月時点での女性国会議員の割合は2.7%にとどまっています。

こうした現実の中で、女性や女児の権利について地域全体で考え、声を上げ行動する場を持つことには大きな意味があります。

### 国際女性デーの歴史と意味

国際女性デーは1911年に初めて実施された記念日で、今年で115年を迎えます。今も世界で、女性や女児の権利や平等について考える日として受け継がれています。女性の達成をたたえるだけでなく、今なお残る課題に目を向け、権利と公平の実現に向けた行動を呼びかける日でもあります。今回の2日間のイベントでもスピーチを通じて繰り返し語られたのは、今年のテーマ「Rights. Justice. Action. For ALL Women and Girls.」（すべての女性と女児のために——権利、正義、行動を。）でした。女性や女児の権利を守ることは、特定の誰かだけの課題ではなく、地域全体で向き合うべきことだという思いが共有されました。



### イベント準備とルマナさんとの協働

今回のイベントは、パプアニューギニア赤十字社で保健衛生分野を担当している、ルマナさんと一緒に準備を進めました。

準備の段階から意識していたのは、当日だけで終わる行事にしないことです。他の支部も巻き込みながら今後につながる形にしていこうことや、ボランティアの参加を広げ、地域の人たちが自分ごととして関わられるような流れをつくることを意識して進めました。



## 国連ウィメン エドファス・ムカンダウィレさんのスピーチ

学校でのイベントの冒頭、国連ウィメンのエドファス・ムカンダウィレさんから、母国マラウイのエドファスさんのおばあちゃんがろうそくを持って女性の行事に参加していたというエピソードを紹介してくれました。一人のろうそくの光は小さくても、十人がそれぞれろうそくを持てば、その光はもっと遠くまで届く。社会のよい変化は最初から大きな集団によって起こるのではなく、一人の行動から始まるというメッセージでした。また、子どもたちがこうした場を経験することの意味にも触れられました。すぐに大きな変化になるわけではないかもしれない。でも子どもたちが成長したとき、「小さい頃に、女性や母親を大切にす素敵な行事があった」と思い出す種になるかもしれない。小さな光が集まると、大きな力になる。そんな希望を感じる言葉でした。

スピーチのあと、参加した保護者からは、「私たちの身の回りには不正義があり、それを止めるためには一人ひとりが行動することが大切だ。どこにいても、何をしても、すべての人の権利と尊厳は尊重されるべきだ」という声も聞かれました。

エドファスさんの言葉が、その場にいた大人たちの心にも届いていたのだと感じました。



スピーチをするエドファスさん



参加した生徒

## ペインティングセッション

イベントでは、子どもたちと一緒にペインティングセッションを行いました。

国際女性デーのテーマカラーである紫の絵の具を手につけ、大きな紙にみんなで手形を押していきました。それぞれの手形は大きさも形も異なっていて、並んだ様子そのものがとても印象的でした。

このハンドペイントには、一人ひとりの違いを表すだけでなく、暴力を許さず、互いを尊重する社会をつくってきたいという思いも重ねられていました。



A



完成したハンドペイント

## カップケーキセッション

続いて行ったカップケーキセッションでは、国際女性デー、パプアニューギニア赤十字社、IFRC、ICRCそれぞれのロゴが印刷されたカップケーキを用意し、みんなで食べながら国際女性デーをお祝いしました。甘いものを手にした子どもたちの笑顔や、写真を撮る前に思わず食べ始めてしまう様子、それを見て笑う大人たちの姿がとても印象に残っています。

国際女性デーを祝うことや母親や家族に感謝することを、皆で自然に分ち合える時間になっていました。子どもたちにとっても、こうした明るい時間が記憶のどこかに残ってくれたらいいなと思います。



最高の笑顔！



カップケーキを楽しむ子供たち



IFRCのロゴの入ったカップケーキ



それぞれのロゴの入ったカップケーキ

## ジェニー先生の赤十字特別支援学校での取り組み

ジェニー先生は、2014年からこの学校に勤務し、教員としての経験は25年に及びます。もともとは一般の小学校で教えていましたが、多様な子どもたちの学びを支える教育を学び、特別支援教育に携わるようになりました。インタビューの中で、子どもたち一人ひとりの学び方の違いや、必要な支援の多さについて語ってくれました。「子どもたちが将来少しでも自立して生きていけるようにすることが大切です」と話し、学校の外でも子どもたちを訪ね、地域とつながりながら支援を続けています。一方で、家庭環境や地域の状況の中で多くの困難を抱える子どもも少なくありません。特に障がいのある女兒たちは、家事や家族の手伝いを担いながら学校に通っていることもあるといいます。ジェニー先生は「私一人ではできないことも多い。だからこそ、地域や社会全体で子どもたちを見守ってほしい」と語っていました。

## 五十嵐所長のメッセージ

IFRCパプアニューギニア国事務所の五十嵐所長からもスピーチがありました。ペインティングセッションで並んだ手形を前に、大きさも、色も、形も異なるそれぞれの手について語りました。その手で不正義を止めることができること、その手を挙げて自分たちの権利を伝えることができること、そして周りの人のために何か良いことができること。一つひとつ違う手に、それぞれの力があるのだとあらためて感じる言葉でした。

「あなたたちには能力があり、価値があり、明るい未来がある」という言葉もあり、会場にいた子どもたちや保護者に向けたメッセージとして心に残りました。



手話で翻訳をするジェニー先生



生徒とジェニー先生



IFRCパプアニューギニア国事務所  
五十嵐真希所長

## 3月8日のウォーキングイベントへ

国際女性デー当日は、パプアニューギニア政府、JICAとAmazing Port Moresby主催のウォーキングイベントに参加しました。早朝5時30分、エラビーチをスタートし、セント・ヒューバート・マリー・スタジアムまでの約5キロを歩きました。パプアニューギニア赤十字社スタッフと家族5名、赤十字ボランティア4名、IFRCメンバー3名、でチームとして参加し、今回はパプアニューギニア赤十字社とIFRCも協賛として、オフィシャルTシャツにロゴを入れていただきました。

当日は数百人規模の参加者が集まり、ジェームズ・マラペ首相、国連ウイメン代表や女性団体のスピーチ、ダンスの披露、クラフトマーケットも開催されるなど、街全体でお祝いする雰囲気でした。

朝の涼しい空気の中、たくさんの人と一緒に歩きながら、「Rights. Justice. Action. For ALL Women and Girls.」のメッセージを地域に広げる一日になりました。



## 2日間のイベントを通して

今回のイベントを通して、障がいのある子どもたちが通う学校で、女性の権利とだれ一人取り残さない取り組みの両方について考える場をつくれたことは、とても意義のあることだったと感じました。また、ウォーキングイベントにはボランティアの方々も含め、さまざまな立場の人が集まり、同じ時間を一緒に過ごせたことも、この日ならではの大切な時間だったように思います。

子どもたちの笑顔、紫の手形が並んだ光景、それぞれのスピーチで語られた言葉、そしてみなさんと歩いた朝。その一つひとつが、とても心に残っています。この日が、参加した子どもたちや地域の皆さんにとっても、何か少しでも残る時間になっていたら嬉しく思います。

そして、この日の経験が、女性の権利の尊重や、公平性の向上につながる行動へと、少しでも広がっていくことを願っています。

